

# 家庭科

中 田 泉

## 1 家庭科における学びを豊かにする聞き合い

子どもは、家庭科を学ぶ以前から、それぞれの家庭生活を営んでいる。着ることや食えることなど人間の生活に欠かせない行為を毎日行っている。しかし、それらの行為があまりにも当たり前であるがゆえに、ほとんどの行為は無意識のうちに行われている。したがって、これまで無意識のうちに行われていた行為の意味や目的を、家庭科の授業を通して初めて意識してとらえることになる。どうしてそのように考えるのか、なぜそのようなことをするのか、その考えに至った根拠は何か、どのようにすればよいのかを学んでいく。

※1 新たな価値  
友達の考えに含まれる  
生活の中に含まれる行  
為や方法

一人一人の価値観が異なるからこそ、友達とかかわって得られた新たな価値<sup>※1</sup>を、自分の生活に取り入れていく意義は大きい。子どもの見方や考え方は、ともに暮らす家族の価値観によるところが大きい。自分の生活の仕方が当たり前であり、違う生活の営みに気付く機会が少ない。自分とは違う見方や考え方と出会ったときは、少なからず驚きをもつことになる。正解が一つではないからこそ、友達と課題解決に向けて、交流する中で複数の考えに出会うことができる。

学習課題に対する受けとめ方には多少なりとも個人差がある。異なる考えや価値を受けとめ、共感したり、認識の違いを感じたりして、自分でも試したり、考えの根拠を実験で検証しようとしていく。

家庭科では、関係づけ再構成を次のように考える。他とかかわりながら、課題に対する解決策を多様に広げていく。そして、その中から自分や家族の状況に合う方法を選択したり、新たな工夫を加えたりしていく。友達との聞き合いを繰り返し行う中で、課題を見つけ、生活をよりよくしようと工夫する力を育てていく。

このことから、家庭科における学びを豊かにする聞き合いを次のようにとらえた。

他とかかわり さまざまな観点から生活事象をとらえ直し よりよい生活  
をつくり出そうとする聞き合い

## 2 聞き合いのために

### (1) 子どもにつけたい態度

当たり前と感じている生活の中での工夫や家族のすばらしさに気付くような目を育てたい。忙しい中でも家族がさまざまな工夫を行っているのは、よりよい生活をつくり出す楽しさやおもしろさがあるからだと気付くことができれば、聞き合いへの意欲付けにもつながると考える。

### (2) 子どもに共有させておきたいこと

まず、子どもが日常無意識に行っている行為を他と比較し意識化させる。自分の家庭生活や生活行為が普通で当たり前であると思っている子どもが、他を意識し、友達の家庭生活ではどうなのだろうか聞き合いの必要感を感じるができる。

次に、ねらいに応じた共通の体験や実習をさせる。共通の体験をした友達の考えを聞くことで、意欲が喚起されたり、共感や認識の違いを発見したりする聞き合いにつながる。そして、聞き合いのよさを実感するのである。

さらに、共通の体験や実習を行う中で、聞き合う視点を明確にさせる。すると、聞き合いの論点がぶれることなく、子どもが自分の考えに至った根拠にもしっか

りと目を向けることができる。と考える。

### (3) 思いや考えが広がる課題を設定する

無意識にとらえていた日常の生活事象の中から問題を見つけ、課題を設定する必要がある。正解が一つではない課題を設定することで、複数の価値を比較し、選択させていく。一人一人の家庭生活が異なる中で、互いの考えを交流することで、自分の問題として情報を整理し、関係づけ再構成へとつながっていくと考える。

## 3 関係づけ再構成する手だて

### (1) 可視化する

交流で得られた価値を、言葉はもちろんのこと、図や表なども用いて示す。自分の生活や家族のことを考えた上で、何に重きをおいて判断したのか、関係づけが可視化されることで再構成へとつながっていく。

### (2) 試行の場を設定する

聞き合いの必要感を生み出すために、例えば食に関する題材では、五感を働かせて感じ取らせる場を設定する。比較実験や試す場を取り入れ、友達と交流し合う。そこで得られた価値を確かめたり整理したりすることで、判断基準が明確になり、自己決定へとつながる。また、科学的な視点で自分の考えを再構成することができる。と考える。

### (3) いろいろな視点から生活事象をとらえる

交流で得られた多くの考えの中から、自分や家族が何を根拠にして選択するのか、それらを判断することができるよう、衣食住のいろいろな視点から生活事象をとらえさせる。それらをとらえ直すことで、生活への新たな働きかけの再構成へとつながると考える。

また、それぞれの視点からとらえた長所だけでなく、短所にも目を向けることで、共通点や相違点をふまえた上で自分の考えを再構成させることができる。異なる立場で自分の考えを見つめ直すことで生活をよりよくしようとする。と考える。

### (4) 交流のしかたを工夫する

生活事象に関する視点を増やし、新たな価値と出会うために、さまざまなグループ構成を目的に応じて編成する。異なる視点・考えを交流し合うことで、意外性のある新たな価値と出会うことができる。同じ視点・考えに至る過程を交流することで、考えの根拠をはっきりとさせることができ、そこから新たな考えへと再構成されると考える。

また、考えの関係をはっきりさせるために、ワークショップ形式でより詳しい情報を得たり、関係づけをより明確にさせるために意図的に発表時間を設定したりするなどグループ構成や交流のしかたを工夫する。

## 4 実践例

### (1) 可視化する

#### ① 6年生「毎日の生活をふり返ろう」

食事や睡眠、入浴などの生活は、子どもにとって、これまで当たり前であり、無意識に行われてきたことである。そこで、休日を含む3日間の自分の生活時間の使い方を、表に書き込み食事の時間をそれぞれ色分けさせた(資料1)。色を付けることにより、焦点をしぼって考えさせることができ、時間の幅もすぐに分かるので、友達と比較することができる



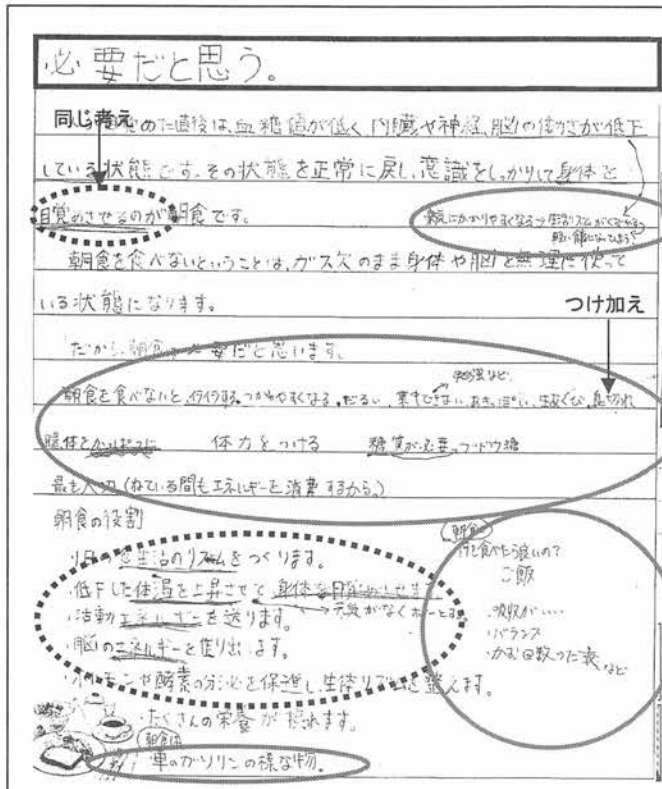
資料1 生活時間を平日と休日の2種類で表し色分けする

はあまり変わらないけど、食べ始める時刻が日によって違うことが分かった。」と平日と休日を比較して、食事時間や時刻について気付きを見つけ始めた。色分けしたことで、友達と食事時間をすぐに比べられた。また、色付けした前後の生活にも目を向け、「休日の朝食を食べ始める時刻が遅いのは、前の日の就寝時刻が遅いからじゃないかな。もっと早く寝た方がいい。」と自分の生活リズムを見直すきっかけにもなった。

このように、生活時間の中から食事の部分だけを色付けしたことで、友達と焦点をしぼって交流し、関係づけすることができた。

#### ② 6年生「朝食のとり方を見直そう」

ほとんどの子どもが家族によって提供された朝食をとっており、朝食を食べる必要性やどのような食品をとっているかについてこれまで意識することは少なかった。そこで、朝食を食べることは体によいと聞くが、本当に体にとって必要なことなのかを調べて聞き合った。



資料2 交流で得られた朝食の必要性を書き加える

と考えた。「わたしは、平日より土日の方が朝食をゆっくり食べている。」「わたしも、休日の方が食事時間が長いよ。朝食も夕食も長いな。」「わたしは、食事時間

「わたしは、平日より土日の方が朝食をゆっくり食べている。」「わたしも、休日の方が食事時間が長いよ。朝食も夕食も長いな。」「わたしは、食事時間

のような食品をとっているかについてこれまで意識することは少なかった。そこで、朝食を食べることは体によいと聞くが、本当に体にとって必要なことなのかを調べて聞き合った。

交流で得られた朝食の必要性を色分けしてワークシートに書き込むことにした(資料2)。同じ考えを赤色、新たな考えを青色として書き込んだ。

A児は、「身体を目覚めさせるために朝食必要だと思う。」と考えていた。友達の「寝ている間もエネルギーを消費するから必要だ。」という考えを聞き、A児は新たな考えとしてワークシートに付け加えていった。交流した後、自分の考えを、ワークシートをもとにもう一度見直す際には、色付けしてある部分を自分の考えと比較し、朝食をとることの意味を再構成させていた。A

児は、色付けされた考えを関係づけ、今の自分たちには朝食をとることがとても大切であるという結論を出し再構成に至った。

このように、これまで当たり前と思っていた朝食の必要性について、友達の考えを共通点と相違点に分類して書き込むことで、友達の考えのどの部分と関係づけられるかが明確になった。そして、自分の考えをよりしっかりとしたものにしたり、改めて朝食の必要性について考え直したりすることができた。

## (2) 試行の場を設定する

### 6年生「朝食のとり方を見直そう」

朝食作りの実習にあたって、朝食作りにかかわるポイントをキーワード（資料3）としてまとめた。栄養バランスを全員共通のキーワードとして、そのほかに自分流のキーワードをいくつか選択し、計画を立てることにした。

キーワードの一つであるゆでる調理方法は、5年生ですでに経験している。子どもは、「ゆでる以外はやったことがないからよくわからない。自分一人でするかな不安だ。」と話していた。栄養バランスをチェックすると、主食がごはんでもパンでも、ビタミンが不足することが分かった。

「朝食作りに野菜を使いたいけど、どれを選んだらよいかよく分からない。」「野菜をゆでたらかさが減ったけど、炒めたらどうなるのかな。調理実習の前に確かめたいな。」と疑問から試し調理を求める声が挙がり、野菜の生と炒めた後の変化を調べるために試し調理を行うことにした。試してみたい野菜をグループで分担し、調理した（資料4）。試し調理後に、野菜の変化をお互いに聞き合い、自分流のキーワードにそった野菜を選択することができた。

このように、いろいろな野菜の試し調理を行うことで、自分流のキーワードに合う野菜かどうか、多くの情報の中から、知りたい情報についてより詳しく聞くことができ、自分の計画に必要なものを選択し、決定することができたと思われる。

## (3) いろいろな視点から生活事象をとらえる

### ① 6年生「朝食のとり方を見直そう ～キーワードを選択する～」

朝食作りのポイントにおいて視点が増えると、それぞれの視点をつないで考えることができたり、たくさんある視点の中からどれを優先させれば自分の目的に合ったよりよい選択や判断をすることができるのかを考えたりすることができる。

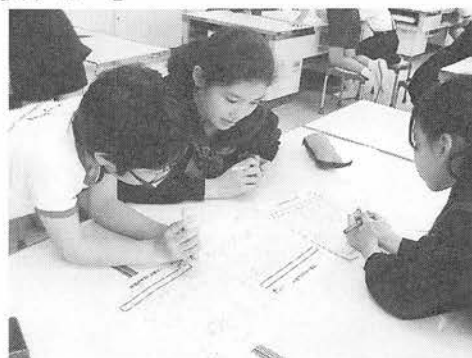
一人一人が考えたキーワードを出し合い、全員で吟味し、クラスとしてのキーワードとしてまとめた（資料3）。子どもからは、「おいしくても栄養のバランスがよくなかったら意味がない。」との発言があり、クラス全員が納得し、栄養バランスを共通のキーワードとした。

- |         |           |
|---------|-----------|
| ・栄養バランス | ・腹持ち      |
| ・時間     | ・色合い、いろいろ |
| ・予算     | ・食べやすさ    |
| ・品質     | ・食品数      |
| ・味      | ・手軽さ      |
| ・組み合わせ  | ・調理方法     |
| ・安全     | ・好み       |
| ・旬      | ・量、カロリー   |

資料3 出し合ったキーワード



資料4 グループで分担し試し調理を行う



資料5 重視するキーワードを聞き合いで決定する

「わたしは色合いにこだわりたい。でも、旬のものも使いたいし味にもこだわりたい。どれも大切に迷ってしまう。」「その中で、一番重視していることを一つにしぼったらいよ。ぼくは、色合いが一番に考えているけど、調理はほとんどしたことがないし、朝食だから、手軽さは二番目かな。」と子どもどうしがアドバイスし合った（前頁資料5）。視点がたくさんあることで、選択する材料が増えたのはよいが、その中から何にこだわるのかをはっきりさせておく必要があると子どもが気付いた。そこで、選んだいくつかのキーワードの中で、最も重視することを根拠をもとに、それぞれが一つ決めることにした。一番重視することを決めたが、そのほかのキーワードも残しておき、計画づくりでの聞き合いの材料にしたいと考えた。ふり返りでは、「わたしは、色合いと品質を考えて、味を一番にしました。でも、友達と聞き合っ、色合いを一番重視することにしました。いろいろな野菜を入れてカラフル朝食にしたいです。」と多くの視点の中から、友達の根拠を聞いて、自分のこだわりたいことがはっきりとし、実習につなげていこうとする意欲も高まってきている子どもも見られた。

## ② 6年生「朝食のとり方を見直そう ～材料の野菜を選択する～」



油を多めに入れたので表面がピカピカしていた。  
生の時よりも甘みがでてきた。  
色とりどりがとてもきれいだった。  
色とりどりで、おまやかの見た目がとてもいい。  
やわらかくて食感が良かった。  
ちょうどいい丈までに切れたね。うまかった

ピーマンを使うとしたら、パプリカと合わせて、色とりどりのため3色で使うといい。  
苦みがなくなった

資料6 ピーマンのおすすめポイント

ベーコンを考えていたけど、ピーマンの緑とパプリカの黄色を入れて、もっと色合いをよくしようと思う。」と自分の材料選択に友達の考えをとり入れて再構成し、自分のキーワードに合う材料を選択した。

このように、炒めた野菜のおすすめポイントを自分の選んだ視点をもとに考えを関係づけられたことで、自分の調理実習の材料を選択することができた。

## ③ 6年生「夏の暮らしを見つめよう」

暑い夏を快適に過ごすための工夫を衣食住の3つの視点で調べ、聞き合った。ほとんどの子どもは、これまで特別な意識もなく、暑くなると半袖の衣服を身に付けたり、窓を数か所開けて風を取り入れていた。何気ない生活には、意味があり、昔からの知恵であることにも気付かせたい。

例えば、衣生活の中で、色という視点で工夫を見つけた子どもがいた。「黒い服より白っぽい服の方が涼しいよ。黒い方が熱を吸収するからだね。理科の実験でしたことあったよね。」とこれまでの経験をもとに考えを発表した。何となく涼しく見えるから白っぽい服がよさそうだと考えていたB児は、この考えと根拠に納得し、自分の考えをより強化していくことができた。また、「太い血管が通るところを冷やすと体温を下げるができるよ。だから、冬の寒い時には首にマフラーを巻いて体温を逃がさないようにしているよね。」という色以外の視点で工夫を考えた友達と聞き合った。すると、「白っぽい服を着るだけじゃなく、首に保冷剤を巻く

のも効果がありそうだ。これならできそうだ。試してみよう。」とB児は、快適に過ごす工夫の視点を増やすことができ、自分の生活実践につなげていくことができた。

このように、これまで気付かなかった視点で生活事象をとらえることができれば、生活をよりよくしようと再構成していくことができた。

#### (4) 交流のしかたを工夫する

##### 6年生「朝食のとり方を見直そう」

新たな考えに出会ったり、自分の考えをさらに深めたりするために、試し調理後に、グループプレゼンとワークショップでの交流を取り入れた。まず、4人グループで一つの野菜を担当し調理方法の変化をまとめた。1グループずつのプレゼンを聞いたことで新たな考えに出会うことができた。多くの考えに出会ったところで、さらに詳しい情報を得て、関係づけ、自分の考えに反映させるためにワークショップ形式で交流した。プレゼンで聞いた情報を整理し、自分流のキーワードにそった野菜選びができるようにした。

朝食作りの実習においては、一人調理とペア制度を取り入れた。一人調理は、子どもが、最終的に家族や自分のために朝食を作れるようになりたいという願いから導入した。炒める調理をするのはほとんどの子どもが初めてだったことや、自分では気付かなかった考えに出会わせるためにペア制度を取り入れた。ペアは、重視したキーワードや使う材料での共通点や相違点をふまえて設定した。いくつかの材料のうち、同じ野菜を使う子どもをペアにしたり、同じキーワードを選んでいるが、使う材料が異なるペアにしたり、共通点と相違点を必ず取り入れたペアを設定した。共通点と相違点が両方あることで、聞き合う時に、相手の考えに共感したり、同じ視点に立ってアドバイスをしたりすることができ、それらを自分の考えに反映しやすくなった。

例えば、同じ野菜を使っている、それに付け加えるものに卵を選んでいる子どもとベーコンを選んでいる子どもがいた。お互いの料理を試食し、キーワードである組み合わせについて聞き合った。「ペアの友達は、あっさりとした野菜と塩気があるベーコンの組み合わせで、とてもおいしかった。私も今度はニラと卵にベーコンを組み合わせで作ってみようと思う。」と共通点である野菜の特徴を生かし、キーワードである組み合わせとして何を付け加えたらさらにおいしくなりそうかを関係づけて自分の考えに反映していった。

また、前半に実習を終えて、ペアでの聞き合いを行った。そこでは、自分の失敗した点をペアに伝えたことで、後半の子どもがそのアドバイスを生かし、キーワードにそった調理をすることができた。

このように、共通点と相違点を生かしたペア制度では、お互いの考えをしっかりと受けとめられ、関係づけがスムーズに行われ、これからの生活に友達の考えを反映させてよりよくしようとする再構成に繋がったと思われる。

## 5 成果と課題

関係づけ再構成するために、共有させておきたいことを土台として、手だてを講じてきた。共通点や相違点を明らかにする関係づけには、一つの視点だけでなく、いろいろな視点で生活事象をとらえていく必要がある。また、関係づけを可視化することで、自分の考えをスムーズに再構成させていくきっかけにもなったと考える。

その一方、可視化することで関係づけが行われても、そこから自分の考えを再構成させていくには、さらに手だてが必要である。そのためには、深く追求するための発問や根拠を確かめるための資料などを考えていきたい。視点を単に増やすだけでなく、視点を変えて考えを見直すことの大切さを実感させ、もう一度自分の考えを立ち止まって考えさせていく。そのためには、試行の場を目的に応じて、軽重をつけて題材構成の中に位置づけなければならない。活動が目的になってしまわないように、課題や目的に応じて交流のしかたを工夫し、主体的に聞き合いを行っていきけるように今後も努めていきたい。